2016.1.29

２０１５年記憶に残った本

1. 「熱狂宣言」　小松成美著

　株式会社ダイヤモンドダイニング代表取締役社長である松村厚久氏を題材にした伝記小説である。記憶に残るキーワードは、若年性パーキンソン病、１００店舗１００業態、土佐人気質、不屈の精神、1967、レジェンド、友情、神の与えた試練、IPS 細胞などである。昨年最も感動した一冊である。

2. 「青年社長(上下)、新青年社長(上下)」　高杉良著

「ワタミ・渡邊美樹　日本を崩壊させるブラックモンスター」　中村敦彦著

　昨年春、社団法人デレクトフォースの監査部会の研究会に参加した。そのテーマは企業不祥事防止を念頭にしたリスクマネジメントであった。

　ワタミは１９９０年代から急成長した居酒屋である。高杉良氏の小説４部作はその輝かしい成功を小説風に描写している。他方中村敦彦氏はコンプライアンス違反の罪状を告発している。ここ数年の不祥事や過重労働自殺事件の結末を見ると、渡邊氏の晩年は苦悩の時代であったと思われる。

3. 「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」、「戦争の日本近現代史」　加藤陽子著

　昨年有志の読書会で選んだ本である。前者は栄光学園中高生向け講義、後者は東大生向け講義を編纂したものである。いずれも「戦争」の原因や背景をわかりやすく解説している。

　この本で、日中戦争時代の中国側の対日戦略に関する記載がある。「初戦は日本軍に意図的に負けて、米国を参戦させる」が、蒋介石政権の戦略参謀が提案していた。「日本は中国に戦闘には勝ったが、戦争には負けた」というのが歴史的通説である。歴史の裏側にはまだ知らない事実が眠っていて読書への意欲をかきたててくれる。

4. 「冬のアゼリア」　西木正明著

　副題が「大正１０年・裕仁皇太子拉致暗殺計画」とあるように、１９２１年に香港で実際起こった拉致未遂事件をモチーフにした推理小説である。なぜ皇太子を狙ったのか、そこに大正から昭和時代の朝鮮半島と日本の関係が描かれている。現在の日韓関係や北朝鮮外交の歴史的背景にも多くの示唆がある。なお著者の西木氏は、「梟の朝」「孫文の女」など近現代を舞台にした小説が多い。

5. 「マレーシア新時代」　三木敏夫著

　著者はジェトロ職員から大学教授となり、マレーシア研究をライフワークとしている研究者である。海外旅行をすると文化や価値観の違いに時々驚くが、人種と宗教の坩堝であるマレーシアは、アセアン世界を知る上で興味深い国である。日本人は海外ロングステイ先として１０年間１位としてマレーシアを選んできた。その理由は様々であるが、住みやすさの根底にある、多様性、寛容性を育む政策と風土が大きな要素と思われる。私は、昨年マレーシア長期滞在ビザ（MM2H）取得した。今後真夏と真冬をマレーシアで滞在する計画なので大変参考になった。

6. 「リー・クアンユー、世界を語る」　グラハム・アリソン他著

　昨年３月シンガポール建国の父リー・クワンユーが亡くなった。その生前の発言を編纂したものである。マレーシアから分離独立したシンガポールは数年前 GDP/一人で日本を抜いてアジア NO1 になった。その国家指導者の冷徹な国際情勢分析や人間理解が描かれている。都市国家としてアセアンの情報と金融センターを築いた指導者の識見は、企業経営にも通ずる。また中国の未来に関するリーの発言が、昨

今の習近平政権の内外政策を予言したものとして注目されている。

7. 「１００年予測」　ジョージ・フリードマン著

米国政府に世界情勢を提供するコンサルタント（影の CIA と呼ばれている由）の作品である。２００９年に出版され、昨年勃発したクリミア危機を的中したことでベストセラーになった。この本の結論は米国の覇権的地位が２１世紀も続くことにある。そして中国を「張り子の虎」と非常に低く評価している。その根拠として地理、民族、格差、経済構造など地政学的要素を列挙している。

２０２０年代に中国とロシアは国力が低下して没落し、日本・トルコが米国の脅威になるような強国になると予測する。著者は１９９１年に「The Coming War With Japan」を著している。当時日本は、現在の中国と同じく世界第２位の経済大国となり米国の地位を脅かしていた。しかし日本経済はその直後崩壊し２０年間低迷を続けている。２０１６年現在この本の予測された事態は殆ど外れているが、根拠となる地政学的分析が大変興味深い。なお「続・１００年予測」を２０１３年に出版し、米国とイランの関係正常化を予測している。

8. 「China 2049」　マイケル・ピルズベリー著

キンシンジャーに並ぶ中国外交問題専門家の大作である。昨年２月米国で出版され９月に翻訳された。中国の１００年戦略（文中ではマラソンと記載）を克明に分析評価している。その結論は、「中国共産党は１００年かけて長期的戦略を着々と進めている」である。

過去４０年間米国政府は、中国共産党の隠された戦略に気付かず誤解してきたこと、そして著者自身は米国政権の対中政策を誤った方向に導いたと自己批判している。

中国の国家目標は１９世紀の世界秩序の復活である。領土的な野心や海軍力拡張はもはや明白な事実である。昨年習近平主席が米国議会で「１０００年前、南シナ海は中国の領土であった」と発言したのと符合する。なお「三国志」「孫子の兵法」「資治通鑑」など中国の古典的名著が共産党幹部の教科書になっているとの指摘も興味深い。